

## 2017年 ホリスティック・ティーチング&ラーニング学会（南オレゴン州立大学）報告

野沢綾子（教育学博士）

去る2017年9月14-17日にかけて「全体性を探求する一様な声とヴィジョンをつなげる」(Exploring Wholeness: Connecting Voices and Visions) をテーマにして、南オレゴン州立大学の教育学部主催で行われたホリスティック・ティーチング・ラーニング学会 には、150人程のアメリカ内外の研究者・実践者が集った。日本からは、同志社大学の中川吉晴教授、大阪府立大でシュタイナー教育を研究する博士課程大学院生、奥本陽子さん、ニューメキシコ州の大学で教える五味幸子さんと私の4人。タイのルンアルン校関係者、マインドフルネス・カリキュラムを教育・医療の現場で教える政策を推進しているタイ政府保健省の担当者、ドイツで平和学を学んだ外務省の若手外交官を含めた12名、韓国からは、韓国ホリスティック教育学会会長のキム・ボギョン先生、心の平和を中心にした教員養成研究所の所長に就任したばかりのソウ・ミンヨン博士が参加したほか、さらにカナダ、メキシコ、オランダからの参加があった。

学会に先立って14日午前中には学校訪問が実施された。地元で幼稚園から8年生までのホリスティック教育を行っているジョン・ミュア一校、アッシュランド高校、そして日本と韓国の教育者が向かったのは、地元の公立シュタイナー学校。この公立シュタイナー学校はチャータースクールで、決して裕福ではない地域に自分たちで建物を購入し、州の習熟テストなどの規制を受けながらも話し合いを続け、実践を続ける地道な努力を行っていた。5年生の授業と7年生の数学、そして木工、縫い物のクラスを見学したが、どのクラスも子どもたちが生き生きと学びを楽しむ様子が伺われた。

夕方のレセプションは、大学学生部のある構内のカフェテリアで行われ、基調講演者4人に対して「ホリスティック教育の真髄とは」という問いに答える形で始まった。自分自身の先住民の先祖が大変な目にあった話を隠して、アイルランド系アメリカ人として生きて来たが、それを受け入れて初めて自分が楽になったという先生の話。それに続く、ジョン・ミラー教授の「人はみんな聖なる存在である。そして聖なる存在は愛である」とシンプルで心を打つ言葉。自分の子どもが自閉気味であったことをきっかけにして瞑想を始め、自分が変わったことにより、息子と違うレベルで繋がるようになったというパラパーパット先生。彼女はタイのホリスティック教育を率いるルンアルン校と隣接する大学院アソムシンの創始者である。私は、それぞれの心からの回答に学会の方向性を既に感じていた。

学会は15日の先住民の長老でもあるウェスト教授のドラマで幕開け。人間と自然は命の一部である世界観をもつ先住民は西洋社会で分断され、非人道的な差別・虐待の過去を抱えながらも、長老の言葉は参加者の琴線に触れた。日本で言えば、さしずめ神道のお祓いや、仏教の声明などによる幕開けというところだろうか。その後も、朝や昼の全体での集まりでは、必ず、先住民のフルートやドラム、気功を思わせる動き、黙想などが挟まれ、基調講演者の意見を聞いた後は必ず小グループでの話し合いがつづき、お互いの繋がりが大事にされた。ともすると理論重視で左脳に偏る学会という場を、一人一人が全人的に大切にされ、全ての関わりを重要視する体験となるよう、ホリスティックなものに引き戻す仕掛けが所々に散りばめられていた。

学会の会場は新学期が始まる学生部の校舎全体を使い、一階の大会場にはオーガナイザーの一人の庭の花が丁寧に飾られた丸テーブルが置かれていた。「20分、10分と機械的に話を切らずに、流れを信頼して有機的に全体討論をしましょう」というオーガナイザー、教育学部のウィリアム・グリーン先生の言葉は、機能重視で人間的なつながりを疎かにしがちな忙しい現代社会への挑戦でもあり、またその流れを信じる実践であり、安心できて居心地が良いものだった。さらに、全体討論はまさしく時間丁度で終わるという快挙であった。効率性は有機的な流れと同居できるだけでなく、大きな流れを信じる中にこそ完璧な美とも言える効率性が存在すると感じた一瞬であった。

セッションの始まる前には、発表者が前にずらっと並び、1分間のセールス・トークで参加者を誘う。最初のセッションはラウンドテーブルで、9つの丸テーブルを囲み、参加者は発表を聞いて一時間対話をするようなスタイルで始まった。

私はカナダ・バンクーバーのサイモン・フレーザー大学教育学部の修士課程で観想的探求プログラムを指導するチャールズ・スコット准教授の「精神を大切にする学びのコミュニティー 学生の学びのストーリー」に向かった。様々な観想的アプローチにより、学生が「人生の中で一番意味のあった変容」などを振り返り、各々の教育現場に適用することのできる今後の意欲が感じられた。卒業生の一人は今マレーシアの大学でマインドフルネスのカリキュラムを取り入れる運動の中心となって活躍しているという。アカデミアの中でホリスティックな学びが投じる一石が実績として広がっている確証が得られた。

午後のセッションでは、家族間のワークを専門とするコンサルタント、ジョゼット・ルブモワ博士の「共に育つー子どもたちと共に知恵を学ぶ」のワークショップに参加した。まず、彼女は自らの博士論文を元に、0-8歳、9-12歳、13-17歳、18歳以降の時代、それぞれに学ぶ知恵と呼応する価値観に触れた。その後、参加者20数名が自分たちの育児の経験を文章で表現し、

それをお互いに分かち合うワークがつづき、年代別の知恵の理解が実生活より深められた。育児の体験がホリスティック教育という枠からとらえられ、お互いがオープンに話し合える貴重な機会となった。

セルフ・デザインという自分で作り上げるオンラインの修士課程を提供する団体の創始者、ルネー・ポインデクスターさんのワークショップは「ワールドカフェ・スタイル」形式で、小グループに別れたあと、ホストが残り、他のメンバーがグループを移動して色々なテーマで話し合いを行っていくインタラクティブなセッションであった。教育がもっとビジネスやコミュニティと繋がると良いという話や、科学やビジネスに30年遅れをとるといわれる教育だが、存在することを重視するホリスティック教育は、社会の先駆けとして今後社会をリードしていくことになるとの見解が印象的だった。生徒の声を大切にと言いながら、ともすると既存の教師主導からなかなか抜け切れない教育実践も、このような進め方をすることで、生徒だけではなく教師の「声」や「ヴィジョン」も反映されると痛感した。

午後は、一時間以上のワークショップと体験中心の一時間のセッションの選択ができる。参加したワークショップが長かったため、3枠のある体験中心セッションは最後のセッションだけの参加となった。教育ケアの視点から「教育者のウェルネス—内在する聖なる男性性・女性性」のセッションでは、ジョアナ・クロップさんが様々な質問を用意し、それに答える形で自分の男性性・女性性を意識し、つながるワークを行った。壁に神々のような存在の絵が大きく描かれているラウンジのような部屋でソファに座り、テーブルに置いてある30ほどのイメージの中からピンときたイメージを選び、それを自分の中で大事にしたい資質と繋げ、それを分かち合った。私の選んだイメージは半身人間、半身獣のケンタウロスの背中に女性がリラックスして横たわる図、そして男性と女性が陰陽のサインのようにお互いを大事に抱いている図。これを、男性性と女性性が互いの本領を發揮し、そして統合するといった意味と理解した。

2日目は全体のセッションから始まった。ジョン・ミラー教授が「ホリスティック教育は、決してバラ色のロマンティシズムだけではなく、暗闇も包括する全体を受容する教育である」とコメントした。実践するにあたって、伝わらなくてがっかりしたり、気落ちしたりしても、それら全てを含めて、実践して行けばいいのだと言われたようだった。それにつづき、オランダの基調講演者のコルトハーヘン教授が「ホリスティック教育とそうでない教育という見方は、自分たちで作り出した虚構にフラストレーションを抱えているだけなのではないか」と指摘した。自分の子どもに、学校は知的活動のみで楽しくないと言われ、ショックを受けたその教授自身が、「担任が息子の全存在を見ていない」と担任を非難している自分こそ、その担任の全

存在を見ていないのではないかと気づいたという。担任の先生の全人格を見てつながることができたことで、結果として相手が変わり、自分自身の対応も変わったという話であった。「ホリスティック教育ではない」と批判やフラストレーションの対象にする前に、敵対すると自分が思っている相手とどうやっつながっていいのか。その時こそホリスティック教育のいう全人教育のエッセンスを実践するべきである。ホリスティック教育を広げようとする時の壁を感じている多くの教育者にとっても、また前日の公立シュタイナー学校の見学であまりの素晴らしい活動に、思わず自分の子どもたちがこんな実践を受けられたらと羨望と嘆きが強かった私にとっても、示唆に満ちた朝の内容だった。

次に体験的セッション、ラウンドテーブルが続いた。最初の体験的セッションで、私は、国連平和大学の大学院で取り入れられていた感情・関係性の学びのスキル「コネクションプラクティス」の発表を行った。この「教育者のためのコネクションプラクティス」では、広島での平和学習、英語教育のための教材学習、北アフリカ・中東からの教育者との平和交流、また神戸親和女子大大学院のホリスティック教育の講義、親子キャンプなどで取り入れられたコネクションプラクティスの実践について発表し、実際に参加者たちの学校での対立を取り上げて、「感情とニーズ・カード」を用いてみた。怒りにみちた本人の表情が柔らかくなったプロセスを目の当たりにし、参加者から積極的に質疑応答があった。

その後、前回大会に参加して満場を涙にしたロサンゼルス市の公立女子高校のチャータースクールを率いる校長と5人の高校生が、ドラックや若年者妊娠、命が危ぶまれるようなハイリスク地域での「学校全体のウェルネスに対する生徒の視点」を発表した。アンドレア・パーセル校長が生徒一人一人に質問し、それに生徒が答える形の発表である。各々がうつや低い自尊感情に悩み、人をつっぱねて生きていた当初から、入学後先生たちや仲間たちに支えられ、恐怖におびえる時は共に瞑想を行い、自分の方向性を見つけていく様子が語られた。「教育者に伝えたいメッセージは」と聞かれ、うつで自尊感情がなかったと語る女生徒が皆の目を見据えて「意識を向けて」「あきらめないで」といったその存在感に、みんなが圧倒された。

ラウンドテーブルでは、タイのホリスティック教育のリーダー的存在である私立のルンアルン校の中等部の校長サクネ・ブーンヤバンチャ先生と卒業生が「ルンアルン校の価値観重視の学校教育システムとその実践」を共同で発表した。価値観教育がいかに大切にされ、カリキュラムに反映されていることと、卒業生が漁村に住み込んで漁民と持続可能な村のあり方を模索する環境プロジェクトについて堂々と発表した。生徒はなぜ、わざわざ都会からこんな漁村で？という戸疑いがありながらも、同じ釜の飯を食べ、一緒に船に乗ることでしか理解しえな

かった現実を知り、その現実に即した生徒のリサーチが心に残った。このプロジェクトは持続可能な社会賞を受賞したという。その受賞賞金で、今回、場を保っていた先住民の長老をタイに招待すると後に聞いた。

ジョン・ミラー教授は、教育における愛をテーマに様々な愛について話した。自己愛、他人への愛、慈愛、学びへの愛、美への愛、非暴力、存在、そして宇宙的な愛などが、学びや教えの中でどのような意味をもつのかを、トロント大学での大学院生の学びの例などを用いながら情熱的に語られた。参加者からは様々な質問が出たが、なかなか使いにくい愛という言葉、堂々と教育の中で使っているのだという確信が新鮮だったというコメントには、みんながうなずいていた。自分も多大な影響を受けた博士課程の指導教官の授業を再び学生として受講できたようで、19年たっても変わらず多くの人の心を震えさせる恩師の言葉に接し、6年もの年月指導してもらった幸運を噛み締め、つくづく感謝の念が湧いた。

充実した1日が過ぎた2日目の夜。恒例の「芸術の夜」が学生部のカフェで繰り広げられた。ワイン、チーズ、ケーキを手に、ロサンゼルスの子供の即興劇、ジョン・ミラー教授の「Going home」の歌、ウィリアム・グリーン先生と卒業生のフィドラー演奏や、シアトルのオルタナティブ教育の生徒さんのバイオリン演奏、ホリスティック教育の実践談をとらえた時には笑える長編の詩の読み上げ、ヴィパッサナ瞑想のリトリートの様子をコメディ化したもの、ピアノの弾き語りと盛りだくさんのプログラムを堪能した。海外参加者の出演を請われ、韓国の参加者がアリアンの歌を、そして日本勢は、奥本さんと私が日本語で「ふるさと」を歌い、また英語ではケルト民族の歌が心から捧げられ、喝采を受けていた。ジーンとしたり、お腹から笑い転げたり、参加者の違う一面を知り、更につなぐの深まった、なくてはならない一夜となった。

最終日。基調講演者のまとめの後、今後はどうつなげるかの話し合いとして小グループに別れて話し合う。私のグループには、「この学会は白人中心で自分の体験したことが通じない」という疎外感を感じ、途中で帰ることになったアフリカ系アメリカ人の共同発表者がいた。ただ来たい人は来てという招待ではなく、多様性を含むにはもっと積極的な働きかけが必要という意見に対し、最近白人男性の大学人として学生の標的になって様々なコメントを受ける大学関係者が、「差別をしていないということだけではならず、マジョリティとして存在するだけでマイノリティに影響を与えているということを理解する繊細さが必要」という体験を話した。多様性の件で揺れるアメリカ社会が伺えると同時に、ホリスティック教育の基本である「含む」ということはどういうことなのか、また日本の現状についても深く考えさせられ、このディス

カッションはフロアから全体にシェアされた。

毎回どの基調講演も発表もみんな「素」の自分から心を込めて話され、自分が自分でいられるホリスティック・ティーチング・ラーニング学会だと思っていたが、上記のような人がいたことに何かできることはあったのかと思いを巡らした。人を全体として見る時、悲しみも痛みも分断されない。シアトル近郊でオルタナティブ教育をリードする私立学校の創始者が、両親を同時期に亡くしたところで企画中は何も参加できなかったが、司会役を任せられ、こういう形で貢献できることになったのが嬉しいと涙ぐみながら壇上で話した。開催中にも参加者の一人が倒れて病院に運ばれるということが起きたが、その際、先住民の長老がドラムを叩き、みんなで祈りを捧げた。その祈りが通じたかのように、翌日には本人が笑顔で戻ってきた。討論も含めて、その一つ一つが紡がれ、共同体としてのつながりとなっていったのだと思う。

学会後、タイの教育者とさらに近隣のシュタイナー幼稚園を訪問し、森林公園や周辺散策をし、タイの教育法が改定され、オルタナティブ教育が2年後に認可される動きになっていること、また南オレゴン州立大学でもいよいよホリスティック教育学科が新設される準備が整いつつあるということを知った。地元で農場とシュタイナー教育を始めた教育者の方の夕食にも招待され、新しい教育の風は至る所で吹いていると実感し、希望を感じた。

11月23-25日にはタイのチュラロンコン大学で「価値の学び」をテーマにして、第5回アジア太平洋ホリスティック教育ネットワークの国際会議が開催される。「ホリスティック教育はまだ国内では少数派である今だからこそ、世界中のネットワークとつながって、お互いをエンパワーすることが大事」というタイの先生のコメントにあるように、日本のホリスティック教育実践者・研究者、そして学生のみならず、ホリスティック教育に興味のあるどんな方も、是非このような海外の学会に出席して、大いにリチャージされ、それを日本の教育の向上にさらに貢献できる原動力にして頂ければと思う。